



## 最近のセンター研究会・講演会



### 東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所 第1回学術交流連携講演会の報告

初夏の北海道において、伊達市噴火湾文化研究所との協定に基づく第1回の学術交流連携講演会が実施されました。東北アジア研究センターでは、国内外の研究者や市民に所属教員の研究成果を公表するため、定期・不定期の講演会や研究会を実施しています。今回は、仙台圏外の一般市民を対象として、初めて伊達市噴火湾文化研究所との共催で講演会を開きました。会場は噴火湾を望む、だて歴史の杜カルチャーセンターで、明治初めの亘理伊達氏らの足跡を伝える開拓記念館の向い側にあります。

東北アジアからの講師は2人、谷口宏充教授と平川新教授が当地へ赴きました。講演に先立って、伊達市の有田勉教育長が東北アジア研究センターと伊達市との間で学術交流協定を結び、その一環として本日の講演会が設定された旨の紹介をしました。その後、さっそく1人目の谷口教授による「中朝国境の活火山白頭山はいま」の講演に入りました。谷口教授は、地元の有珠山の例を引きながら、画像を紹介しつつ国内・国外火山噴火の状況、渤海王国滅亡前後の白頭山での噴火、現在の火山調査の方法などを、いくつかのセクションに話題を分け、火山研究の意義をわかりやすく紹介しました。昭和神山のふもと町ということもあり、参加した市民は眼を大きく見開いて聞き入っていました。しばしの休憩の後、2番手の平川教授が、「開国以前のロシアと北海道」と題して、江戸時代の日露関係の歴史を、ロシア側からの対応を基軸とし、漂流民やロシアの日本語学校などに焦点をあて、ややもすれば大黒屋光太夫や日本側の視点に傾きがちな従来の日露関係を、ロシア側資料によって、立場を変えた視点から解き明かしました。話の間に、戦後の日本歴史学界で支配的であった江戸時代はお役人様と人民との緊張的対峙が社会の基本構造であったとする歴史観について言及し、それは一

面的なもので、江戸幕府体制が250年つづく背景には、協調的な社会構造もあったというような歴史学全般に亘る事柄にまで話がひろがり、「水戸黄門」的世界に慣れた聴衆に驚きを与えていました。

今回、第1回の学術交流連携講演会ということで、センター側も力を入れ、講師・司会者の他、事務から伊藤・前川・酒井3女史の派遣を得、手不足の伊達市の事務局側に合力したことにより、講演会をスムーズに運営することができました。聴講者は伊達市側の発表数に抛れば60名強、市内の他、室蘭などから来られた方も多かったようです。伊達市で製作したポスターの他、開催前日の北海道新聞などにも紹介記事が大きく出ていました。講演会を総括された噴火湾文化研究所の大島直行所長は、次回以降は、聴衆は更に倍、3倍にと力説していました。しかし、相対的に人口の少ない南北海道、無理をせず、互いに長く有用な交流をつづけ、100年前、亘理の人々が当地の人々にいただいた心遣いに答えれば良いのではないかと思います。所長大島直行氏によれば、伊達市の文教政策は20年、30年先を見すえたもので、とりわけ人材育成に力を入れているとのこと。今回の本センターの活動は一つの知的貢献として、当地の地域活性化に多少なりとも有効に作用するでしょう。

当日、大島所長から直々に研究所秘蔵の藤田嗣治ゆかりのシャーマンコレクションをご披露いただきました。外部公開をする時は、協定先の本センターのみがその任を担えるとの言もいただいております。  
(磯部 彰)

